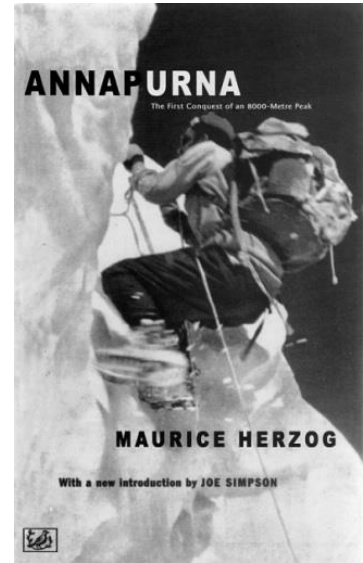


Maurice Herzog 著 Annapurna

今から約 57 年前、ヒマラヤの 8 千 m 峰が史上初めて登頂され、所謂ヒマラヤン・オリンピック時代を迎えることとなった。1950 年のことである。人類で最初に 8 千 m 峰の登頂に成功したのがフランス隊で、この本の著者モーリス・エルゾークはその隊長であった。初めて人類の登頂を許した 8 千 m 峰はヒマラヤ中部に聳えるアンナプルナ I 峰 (8078m) である。因みに、これに先立つこと 30 年、国威をかけたイギリスは何回もエベレストに遠征隊を派遣していたが、成功したのはアンナプルナ初登頂に遅れること 3 年後のやっと 1953 年のことであった (初登頂者は有名なヒラリー卿とシェルパのテンジン・ノルゲイ)。アンナプルナを嚆矢として、その後の数年間にヒマラヤのジャイアント (所謂 **eight thousanders** 14 座) は次々に初登頂されていった。煩瑣を厭わず記すと、エベレスト初登頂と同じ 1953 年にはドイツ・オーストリア隊のナンガ・パルバット (8126m)、翌年の 1954 年にはイタリア隊による K 2 (8611m)、翌年にはフランス隊によるマカルー (8470m)、1956 年のスイス隊のローツェ (8501m) とオーストリア隊のガッシャブルム (8034)、そして日本隊の壮挙マナスル初登頂 (8125m) も同じ年のことであった。



この日本隊のマナスル遠征成功は国を挙げての大ニュースになった。当時の新聞 (スポンサーであった毎日新聞) を紐解いて見ると、第 1 面が全てこのニュースで埋められている。敗戦後の国威をかけた大イベントであったのであろう。当時私は確か中学校の 2、3 年生であった。村内の出来事しかニュースにならず、たとえアメリカの大統領が射殺されたとしても村外の出来事には全く関心を示さなかった郷里の草田舎でも、中学校の校長が朝礼でこの壮挙の話をして聞かせたことを覚えている。私の山への開眼の直接の動機は井上靖の『氷壁』であるが、このマナスルの話も幾ばくかは与っているであろう。勿論アンナプルナのことなどは知る由もなかった。

この本は、人類初の 8 千 m 峰の登頂に成功、激甚な凍傷を負いながらも生還した登攀の記録である。著者エルゾークは凍傷の治療のためパリの病院に戻って 8 回にわたって手術を受けた。その病院でフランス語で口述したものを英語に翻訳して出版されたのがこの本である。彼はその後、山に復帰すべくリハビリを重ねたが果たせず、政界に転身して国務大臣やシャモニー市長を務めた。従ってこの本は著名ではあるが、彼の山に対する遺言のようなものであろうか。後に近藤等の名訳「処女峰アンナプルナ」で岳人の間では有名になった。私も読んでみたが、日本の山でさえヒューヒュー言っていたのであるから、このような凄まじいヒマラヤなどは夢のまた夢でイマイチ現実味が無かったが、いつかは海外の山にも登りたいものと憧れる気持ちもあった。

先年、カトマンズの本屋の片隅で偶々この本を見つけた。定価 £ 10.⁰⁰ の本を僅か 400 ルピー (約 600 円) で売っていたので思わず買ってしまった。そのような訳で 40 年ぶりに読み直してみた。最初の出版は 1951 年であるが、このカトマンズで仕入れた本は 10 年ほど前の新訂版でジョー・シンプソンの序が付いている。

新訂版にしてはこれがイギリスで出版された本であるのかと疑うような、印刷も紙質も極めてお粗末で、当然ながら挿入されている写真も古色蒼然たるものであるが、これがかえって半世紀前の本の風情を彷彿とさせる。凍傷で歩けなくなったエルゾークをシェルパが背負って搬出している写真も何葉か入っていて痛々しい。

圧巻は第 5 キャンプから上の場面。ラシュナルと 2 人で世界初 8,078m 峰の登頂は果たしたが、帰途

手足を猛烈な凍傷にやられ、おまけにクレバスに落ち込んだり雪崩に流されたりして死線を彷徨いながらも苦労して下山。エルゾークは何度も死を覚悟したと記している。パーティーのメンバーやシェルパの献身的な介護も感動的である。ヒマラヤ 8000m 峰登山は、今でこそ酸素ボンベが日常的になり、装備やタクティクスも格段の進歩をしているが、50 年前の粗末な装備でよくもこんな所を登ったものと感じさせられる。

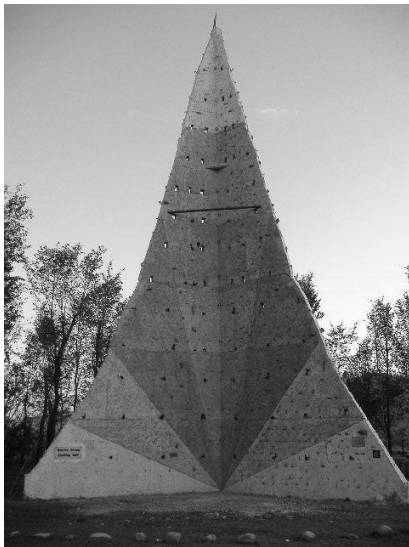
凍傷の後遺症で山を諦めざるを得なかった著者は、終章の “There are Other Annapurnas” で本書を次の文章で締めくくっている。含蓄ある言葉ではないか。

“Annapurna, to which we had gone empty-handed, was a treasure on which we should live the rest of our days. With this realization we turn the page: a new life begins. There are other Annapurnas in the lives of men.”

(アンアプルナ、何の報酬も求めず行ったアンアプルナこそ私達の生涯の残りを生きる宝である。これによって新しい人生の一頁が始まる。人間の生活には、ほかのアンナプルナもあろう)。

Pimlico 版 1997 年刊

余談であるが、2006 年にイムジャ・ツェ峰に登った折、ポカラにある国際山岳博物館を訪れた。内庭にフランス隊のアンアプルナと日本隊のマナスル初登を記念した 2 基のモニュメントが建設されていた。下にそれらを載せておく。(次ページに更に余談あり)



(左:エルゾークのアンナプルナ初登頂を記念して作られたクライミングウォール。中:試しに登ってみる岳友の赤さん。右: 日本隊のマナスル初登頂を記念して作られたマナスルのミニチュア。いずれもポカラの山岳博物館の内庭にて)



(アンナプルナ I 峰 (8,091m) 2007 年 10 月チュルー・セントラル峰遠征時に撮影)

2014年にシャモニーを訪れた時、街の墓地を散歩していたら、その墓地にモーリス・エルゾークの墓があった。2012年93歳で死去。彼はシャモニーの出身ではなかったが、シャモニーの市長を10年間に亘り務めシャモニーの地に縁が深かったのも、この地に葬られたのであろう。その左隣は、モンブラン初登頂者で「アルプス登攀記」の著者、エドワード・ウィンパーの墓であるのも興味深い。



[「山書の小溪」目次に戻る](#)